

第3章

商品を利用する動機と家族構成について

データサイエンス学部 秋山菜月

1. 問題の所在

現代の日本は人口構造が変化し、高齢化がすすんでいる。内閣府によると日本の65歳以上人口は昭和25年には総人口の5%に満たなかったが、平成6年には14%を超え、平成30年10月1日現在では28.1%に達している。高齢者世帯の中でも単独世帯や夫婦のみの世帯の割合が増加傾向にあり、日常生活の中で「医療費」に次いで「食費」の負担が大きい。健康状態を維持するために必要なことは栄養バランスが整った食生活をするのである。しかし、高齢者の場合料理や買い物が困難な人が多いことや単独世帯や夫婦のみの世帯が増えていることから食生活が乱れ、「低栄養」が問題となっている。「低栄養」とは健康に生きるために必要な量の栄養素が摂れていない状況のことである。65歳以上の高齢者の6人に1人は低栄養傾向であり、これらの問題を解決するために、利用したい食事サービスとして配食サービスや食材の宅配サービスのニーズがあることもわかっている。また、インターネットで購入した食材やお弁当を自宅まで宅配してくれるサービスは、料理の時短や買い物に行く手間を省くことができるという多くの利点がある。本稿ではどのような人がどのような理由で利用しているのかということをも明らかにしていきたいと思う。

また、現代の日本では共働き世帯が増加しており、総務省が発表した2017年の就業基本構造調査によると共働き世帯の割合は48.8%とされている。この数字は年々増加傾向にあり、今後も増えていく可能性が高い。共働きによって収入が増えることで生活にゆとりが生まれるというメリットもあるが、掃除や買い物など家事の分担が必要になる。そこで買い物に行くことが難しい家庭などには料理の時短にもなる食材の宅配サービスの需要が高まってくるのではないかと考えた。

以上をふまえ、本稿では食材の宅配サービスを利用する理由を高齢者との同居状況や家族構成に焦点をあてて明らかにすることを目的とする。続く第2節では先行研究を整理し、本稿で分析をする仮説を構築する。第3節では使用するデータと変数を概観し第4節で分析結果を報告する。最後に第5節で分析結果から考察を行う。

2. 先行研究と仮説の検討

2-1. 先行研究

家族構成による食生活の違いについての論文は多く出されている。食生活についての研究(瀬戸ほか 2007)では高齢者を含む世帯を対象に食生活で負担を感じることと食事を作るときの工夫はなにかという分析がされている。この瀬戸らの研究によると、高齢者単独世帯では買い物や片付けに負担を感じ、食事を作るときには味の濃さや栄養バランスを工

夫していることに対して、三世帯同居世帯では献立を考えることに対して負担を感じ、食事を作るときには料理の好みを工夫していることが明らかになっている。さらに、食事を作る際に高齢者への配慮・工夫をしていると答えた割合はすべての世帯で9割以上である。具体的な工夫として味の濃さや栄養バランス、好む料理を作ることがあげられている。また、食事に関する調査では単独世帯で食事基準摂取値に対する不足が懸念されている。

また、保育園児の保護者を対象に食品摂取や食事作りに対する意識調査の研究（関ほか2003）では、食事作りの際に心掛けている項目として挙げられている。例えば、朝食では手間のかからないもの、栄養素のバランスをとる、決まった時間に食べることがあげられている。また夕食では栄養素のバランスをとること、主食、主菜、副菜をそろえること、決まった時間に食べることがあげられている。

2-2. 仮説の検討

先行研究からは、家族構成の違いが食生活に影響を与えることは実証されている。これまでの研究では家族構成の違いが食生活で負担を感じることに違いがあったり、工夫の違いがみられたりすることが明らかとなっている。また、先行研究から、高齢者や子供がいる家庭では栄養バランスを考えたり献立を工夫していたりしている。そのため、食材の宅配サービスを利用している理由にも家族構成による違いがあるのではないかと考えた。先行研究にもあげたように、高齢者がある家庭では栄養バランスを工夫して献立を考えている家庭が多いことから、「高齢者がいる家庭では栄養バランスや塩分、カロリーを考えた食事がしたいから」という理由で会社Xを利用している」という仮説を検証する。

3. 使用するデータと変数

3-1. 使用するデータ

使用するデータには「食とライフスタイルに関する調査」を使う。調査の概要を表1に示す。

表1. 調査概要

調査名	食とライフスタイルに関する調査
調査対象	会社Xの利用世帯の中で主に調理を担当している人
調査時期	2020年9月17日～2020年10月2日
調査方法	留置法（郵送による回収）
抽出方法	会社Xの利用世帯から無作為抽出
計画標本	2000
サンプルサイズ	986
回収率	49.3%

3-2. 使用する変数

従属変数には「会社 X を利用している理由」を使用する。この調査では会社 X を利用している理由ではまるものを尋ねている。この中から問 4 の「8 カロリーをコントロールしたいから」、「9 栄養バランスのよい食生活を送りたいから」、「10 塩分を控えた食生活を送りたいから」を使用する。

独立変数には高齢者との同居状況を使用する。高齢者の同居状況は一緒に暮らしている人について 70 歳以上の人数について 0 人と 1 人以上で、いるかないかの 2 カテゴリーに統合した。統制変数として回答者の年齢と性別、家族の同居人数（連続量）を使用した。年齢については、10 代・20 代・30 代を 30 代以下、70 代・80 代・90 代以上を 70 代以上とし、5 カテゴリーに統合した。なお欠損値のある回答者は分析から除外し、最終的に欠損値のない 776 名を使用した。

表 2 に使用する変数の記述統計量を示す。この表によると、健康に関する会社 X を利用する理由においては栄養バランスのよい食生活を送りたいという理由が一番多いことがわかる。また、全体の約 3 割の人が高齢者と同居していることがわかる。

表 2. 使用する変数の記述統計量

変数	n=776	
	Mean(%)	SD
従属変数		
会社 X を利用している理由		
カロリーをコントロールしたい	10.2	
栄養バランスのよい食生活を送りたい	42.9	
塩分を控えた食生活を送りたい	6.8	
独立変数		
高齢者の同居状況		
いる	31.1	
いない	68.9	
回答者の年齢		
30代以下	15.2	
40代	29.4	
50代	22.7	
60代	15.5	
70代以上	17.2	
統制変数		
家族の同居人数	3.19	1.23
回答者の性別		
女性	90.1	

4. 分析

4-1. 基礎的な分析

まず基礎的な分析として、高齢者との同居状況と健康に関する会社 X の利用要因の関係についてクロス集計したものを図 1 に示す。クロス集計の結果、栄養バランスについては高齢者がいない家庭のほうが会社 X を利用する理由として選択している人が多く、塩分とカロリーについては高齢者がいる家庭のほうが会社 X を利用する理由として選択している人が多い ($\chi^2=5.887$, $df=1$, $p<0.05$)。次に、回答者の年齢と健康に関する会社 X の利用要因の関係についてクロス集計したものを図 2 に示す。クロス集計の結果、栄養バランスは若年層のほうが選択している人が多く、塩分とカロリーは年齢が上がるにつれて選択している人が多い ($\chi^2=14.41$, $df=4$, $p<0.05$)。

この単純集計の結果からは高齢者の同居状況や回答者の年齢によって会社 X を利用する理由が変わってくるのがわかるが、そのほかにも性別や同居人数といった別の変数に関わっている可能性がある。よって、次節では多変量解析によってこれらの変数を統制したうえで高齢者の同居状況や年齢と会社 X を利用する理由に関連がみられるか確認する。

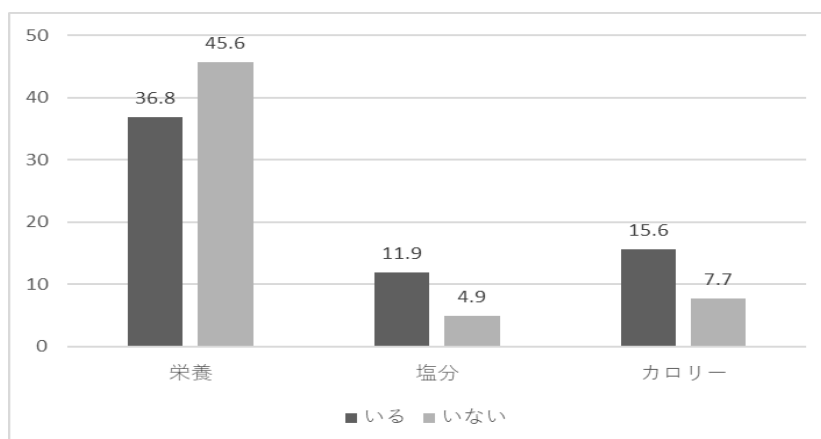


図 1. 高齢者の同居状況と健康に関する会社 X の利用要因の関係

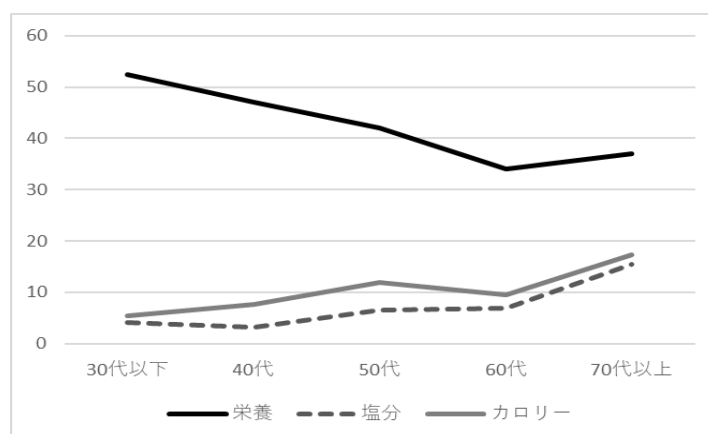


図 2. 回答者の年齢と健康に関する会社 X の利用要因の関係

4-2. ロジスティック回帰分析

本節では高齢者の同居状況や回答者の年齢が他の変数を統制しても影響があるか、多変量解析によって検討する。「会社 X を利用している理由」を従属変数、「高齢者の同居状況」と「回答者の年齢」を独立変数とし、「同居人数」と「性別」を統制変数として、二項ロジスティック回帰分析を行った。最終的な結果は表 3 のようになった。この表によると、栄養バランスについて、年齢が有意水準 5% で有意であり、年齢が低くなるほど栄養バランスが会社 X を利用している理由として選択する。塩分について年齢が有意水準 5% で有意であり、年齢が高くなるほど塩分が会社 X を利用している理由として選択する。カロリーについて高齢者の有無が有意水準 5% で有意であり、高齢者がいる家庭ほど塩分が会社 X を利用している理由として選択する。また、同居人数については、カロリーのみで関連がみられ、同居人数が少ないほうが選択する人が多い。性別については有意な関連はみられなかった。

以上の結果より、カロリーを選択するのは高齢者の同居状況に影響し、栄養バランスと塩分は回答者の年齢に影響することが明らかとなった。これを踏まえて次節では考察を行う。

表 3. 二項ロジスティック回帰分析の結果

変数	栄養		塩分			カロリー	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)		B	Exp(B)
切片	0.609	1.838	-4.167	0.015	**	-1.237	0.29
高齢者の有無	-0.079	0.924	0.398	1.489		0.752	2.121 *
年齢	-0.192	0.825	* 0.322	1.38	*	-0.041	0.96
同居人数	-0.076	0.927	-0.089	0.915		-0.248	0.78 *
女性	0.324	1.382	0.112	1.118		-0.388	0.678
n		776		776			776
Nagelkerke R2		0.027		0.06			0.043
Cox and Snell R2		0.02		0.024			0.02

Note.+p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

5. 考察

本稿では高齢者がいる家庭では栄養バランスや塩分、カロリーを考えた食事がしたいからという理由で会社 X を利用しているという仮説で分析を行った。その結果、カロリーについては仮説通りの結果が得られた。しかし、栄養バランスと塩分については高齢者との同居状況ではなく、回答者の年齢に関連があることがわかった。

高齢者がいる家庭でカロリーが会社 X を利用している理由として選択する人が多いことから、高齢者の健康のことを考え、自分ではカロリーを考えた献立を考えるのが難しいため、会社 X に頼る人が多いのではないか。また、若年層のほうが栄養バランスを選択するのは意外な結果であり、会社 X を利用する若年層の人は栄養バランスを重視した食事をしたいということがわかった。若年層のほうが栄養に対する関心が高い人が多いと考えられる。しかし、この調査は会社 X を利用する人を対象にしたため、調査対象を広げることで、若年層全体での食生活で心掛けていることが明らかになるのではないだろうか。しかし、

年齢が上がるほど塩分を考えた食生活がしたいということは納得できる結果である。高齢化で味覚の低下による塩分の取りすぎを防ぐことを目的としたり、生活習慣病による減塩を考えた食生活を送りたいと考えたりする人が多いのではないか。

最後に残された課題について指摘する。今回は会社 X を利用する理由が高齢者の同居状況によって変わるという仮説を検証したが、子供の有無など他の変数も加えることで会社 X を利用する理由に変化があるのかを検証する必要があるだろう。また、他の会社 X を利用している理由との関連を分析することで家族構成との関係が明らかになるのではないかと考えられる。

6. むすび

現代の日本は高齢社会であり、健康志向の人が増えてきている。また、先行研究でもあげられているように、三世帯同居家族では高齢者に対する食事面での配慮をされている世帯が多く、今後もさらに必要になってくると考えられる。健康面でもメリットが多い食材の宅配サービスなどをうまく利用することでよりよい生活になっていくのではないだろうか。

参考文献

- 瀬戸美江・塩谷知華・澤田崇子・藤本健四郎, 2007, 「世代構成の違いが食生活に及ぼす影響」『日本調理科学会誌』 40(1):15-21.
- 関千代子・加藤栄子・成田豊子, 2003, 「幼児の食生活に関する研究—子供の食事状況と保護者の食意識」、『淑徳短期大学研究紀要』 42:127-140.
- 内閣府, 2018, 『令和元年度版高齢社会白書』.